

2022年1月30日 説教『いのちを取り戻す』

高橋克樹牧師聖書

歴代誌上29章6〜19節、マルコ福音書1章40〜45節

この重い皮膚病の人を癒す物語を理解するためには、当時の社会通念の枠組みと人間の身体性の関係性を理解しておく必要があります。たとえば、人が食事会の支度をして友だちを招くとします。招待したのに誰も理由をつけて断るといふことが起こる譬がルカ福音書にあります（14章15〜24節）。招待された人が皆用事を理由に断るのです。食事の支度はできているのに、部屋はから空きです。そこで、主人は僕を遣わして欠席した客の代わりに誰でもいいから街角で見つけた人を連れて来いと命じます。その結果、どういう状況になるか。性別も身分も、自由人や奴隷の違いもなく、身分の高い人と低い人、汚れた人と清い人たち（当時の社会儀礼による）がみな隣り合わせに席に就くこととなります。これが実際に起これば食事の席は混乱状態になります。

もし、路上生活者が玄関に来たとします。食べ物あげることはできません。けれども台所に招いて食事をさせるとか、家族と一緒に夕飯を食べるとか、自分の友人たちと一緒に食事をするでしょうか。一般にはできないことです。もし、自分が大きな会社の社長だとします。社員の立食パーティーでの食事と、レストランで部長たちと食事をすると、高級料亭で社長と食事をするとでは、おのずと食事のランクに違いをつけるでしょう。もし差をつけない社長は常識を知らない人物と見なされます。イエスの時代でも21世紀でも、どんな状況で、誰を招いて食事を一緒にするかは社会的な立場や関係性で変わるのです。民主主義社会と言われていて現代社会においても、誰がどこで一緒に食事をするかは規則はあるのです。たった50年前の公民権運動前のアメリカでは白人と有色人種は食事の席もトイレの場所も、バスの席もみな違っていました。日本でも障害者が車イスで公共の交通機関に乗車しようとする、30年前は拒絶されていました。障害者が街に出ることが敬遠されるのが社会の常識だったからです。このように分離された食事の席、区別された生活の場はその当事者

の社会的位置を明らかに示すことになるのです。逆にイエスがしたように徴税人や障碍者、売春婦や病人たちとの「開かれた食事」は平等を象徴するだけでなく、社会規則へのチャレンジでもあったのです。だからイエスは神の国を象徴することとして「区別のない食事の席」を設けて、自ら積極的に罪人と言われる人々と食事を共にしたのです。逆に言えば、徴税人、売春婦、罪人とレッテル張りをするのは、現代でも自分の気に入らない人間を侮蔑する際の決まり文句ですし、自分の思考の枠組みに納まらない人間を非難するときの常套句でもあるのです。

マルコ福音書では弟子の召命のちイエスによる癒しの物語が続きます。これは信仰によって病気が癒される話ですが、特徴的なことはイエスを信じることで癒されるということが起きている点です。これはイエスに權威がある（1章22節）ことは信じることの別の表現です。40〜45節の重い皮膚病の人も同じです。同じ食事の席で誰と一緒に座るかどうかは、誰と空間を共有するのかという意識が問われることなのです。どこの席に座るかは、社会全体における人間の関係性を縮図として表わしているのです。これは人間の身体も同じで、身体が社会における人間関係を象徴しているのです。中高校で髪を激しい色に染めるとか、制服を無視して私服で登校することは学校という特定の社会に喧嘩を売っているのと同じです。個人の身体が社会体制を模倣するか否かで、その人の社会での適応力が測られるのです。重い皮膚病の人は自分で社会体制を模倣するか否かを決定できる立場にはいませんでしたが、皮膚病という身体上の違いから「汚れている」という区別を押し付けられて、人間の交わりから疎外されていたのです。

なぜなら、当時のユダヤ教は政治的にも文化的にもローマ帝国によって抑圧されていたので、自分たちユダヤ教の社会的な絆を守るために「区別の境界線を身体上の違い」によって設けていたのです。そのことによってユダヤ教社会の求心力を保っていたからです。もし、身体上の境界線が崩れるならば、ユダヤ教社会はローマ帝国の社会的・文化的な思考にやすやす

と取り込まれてしまったでしょう。戦争中の日本が国内において売国奴というカテゴリーを用いて精神的な締め付けをしたのと同じです。

こういう桎梏の状況の中で、一人の重い皮膚病を患う人がイエスに、御心ならば清めてほしいと願い出たのです。注目したいことは「病気を治してほしい」と願ったのではなく、「清めてほしい」と願っていることです。清めるということは心理的・社会的な側面での癒しを求めているのです。当時の律法によれば『衣服を裂き、髪をほどこき、口ひげを覆い、「わたしは汚れた者です。汚れた者です」と呼ばわらねばならない』（レビ記13章45節）とあるように、公道で自分に接触しないように周囲に警告を発しなければならなかったのです。家族と離れ、道行く人々にも自らが汚れた者だということを言わなければならぬ屈辱感は大変なものです。この人が自分の不運を嘆く涙も、氷のような現実を溶かしはしないし、鉄のようなユダヤ教社会の掟を崩すこともできなかつたのです。

以前にフクシマの放射能汚染の地域の方と話した時に、いつもいつも放射能のことを考えていたら息苦しくなって、自分を見失う気分になると言っていました。でも、何が悲しくて切ないかといえば、「子どもが遊びに来てお土産を渡すと、子どもは途中でそれを捨てる」のだそうです。捨てることが分かっても、お土産を持たせたいという「気持ち」を伝えるたくて持たせるといいます。その話を聞いたとき、私もまたそのような枠組みを今の日本でつくっている側の一員である事実を突き付けられた気持ちになりました。私たち東京の間はフクシマの人たちを癒すことができるのだろうかと思われました。

現代人であり私たちは、病気を治すものと考え、医者も疾患を診断して治療します。しかし、多くの場合、病いを患っている人は癒されることを願っているのです。もう東日本震災から何年もたつて、今のフクシマの人たちが癒されることを願っている人は少なくなっていると思います。東京にいる私たちは電力がなければ今の生活が維持できないという考える疾患を抱え、フクシマは自分たちが消費しない電力をつくることで電力会社に依存しなければ

ば生きていけない病を抱えたのです。病いを癒すためにはこの構造が変革されなければならないでしょう。社会から排除されて、仕事を失って、生きる手立てを失っても、イエスのように病を癒すことはできません。それは社会的な隔ての中垣を取り去り、その悩みに共感し、その苦しみを尊厳と愛で包み込むことができれば可能なことです。

イエスはこの重い皮膚病の人を癒し、そして祭司によって清くなったことを保障してもらうように促しています。この癒しをする際にイエスは『深く憐れ』んだのですが、この個所の有力な写本では「怒って」となっているものがあるのです。つまり、イエス個人の心情としては深く憐れみ、社会の中で「人間としての尊厳性」を奪われている点では怒っていたのではないのでしょうか。もしかしたら、イエスが祭司に癒された身体を見せて「彼らへの証」（44節）としたことは、彼ら祭司の見解に対するチャレンジであったのかもしれない。イエスは荒野で誘惑を受けていますが、それは石をパンに変える物質の変化を行う力の誘惑でした。しかし、イエスが行った奇跡とは物質を変えるのではなく、社会の枠組みを変えること、それに立ち向かう力を人間が養うことではなかったのかと思わされます。それがただ一人を癒すことから始まる本当の福音なのではないかと思わされます。